

# 青年期の自己形成と ピア・サポート活動

春日井 敏之 (立命館大学)

## 1. 青年期の発達課題と自己形成

### (1) 自立性、協働性の再編、統合と自己形成

青年期は、広義には中学生・高校生から大学生までの期間としてとらえられ、就職、結婚などを通して社会に着地することによって成人期へと移行していきます。社会的自立は、高校や大学の卒業を迎えた青年たちにとっては直面する現実的なテーマであり、青年期から成人期の課題として引き継がれます。具体的には、経済的自立、精神的自立、性的自立、居場所の獲得、社会的役割、政治参加、シチズンシップ、ライフスキル、多文化共生といった視点から、その内容が論じられてきました。しかし、これはある到達した状態を指すのではなく、社会とつながって自分を主体的に生きるプロセスであり、人は誰もがその道の途上にあるといえるのではないのでしょうか。

私たちがヒトとして生まれ、人間として育っていくプロセスを概観すると、そこには、2つの志向性の発達が見られます。1つには、独立した個として主体的な存在にこだわりながら自立性を志向すること。2つには、家族、学校、地域、社会、世界などとかかわりながら社会的な存在として協働性を志向することです。青年期は、この自立性と協働性を自分流に再編、統合しながら、自己を形成していく時期なのです。E・H・エリクソン(2011)は、発達論のなかで、これを自己意識と他者承認の統合としてとらえ、アイデンティティ(自己同一性)と呼びました。ここには、自己の心理的な意味における同一性と他者との社会的な関係における同一性という、なかなか困難な2つのテーマとその再編・統合という大きな課題が存在しているのです。

### (2) 発達の重層的構造と多様な学生支援の課題

発達のプロセスは、①乳幼児期における親との身体的なかかわり、甘えを受けとめてもらえる安心感等を通した人間への基本的な信頼感の獲得、②学

童期における友人と群れて遊ぶような体験や、大人の技を学びながら誰かのために働くこと等を通して身につく社会性や自立性の獲得、③思春期における親密な友人との出会い、親および自分自身と向き合う葛藤体験等を通じた自己の解体・再編、④これらを経て、青年期である高校から大学にかけて、「社会とつながって自分を主体的に生きる」ための自己の再編・統合の時期を迎えるわけです（春日井、2008）。しかし、この発達の構造は段階論ではなく重層的であり、それぞれの発達段階におけるいわば積み残しを抱えて大学に入学してくるような青年も少なくないのです。

例えば、客観的には力量があるにもかかわらず自己否定感を抱えている学生、逆に基礎的な学力が乏しく大学での学びに苦戦している学生、親から自立して生きたいのにその心理的な呪縛に囚われている学生、一人で頑張ってきたために失敗を恐れうまくSOS（援助希求）が出せない学生、集団に入るのが苦手な授業にも出にくくなっていく学生、友人と話したいけれど気遣いしすぎて話せないでいる学生、問題意識が持たなくて卒業論文のテーマが決まらずなかなか書けない学生、発達特性を持っていて人間関係でつまづいている学生、異なる文化、習慣、人間関係になじみきれない留学生、困難な家庭環境のなかでアルバイトをしながら自活している学生などです。

こうした学生も含めて、徐々にゼミやサークル活動、社会的活動などのなかで自分の居場所を見つけて根を張っていく学生、人間関係は苦手だけれども、図書館に毎日通ったり好きなことに没頭して、そこから人間、文化、自然などにつながって生きている学生もたくさんいます。ここに、青年期である現代の学生の発達課題と支援の課題、および成長の可能性があることをリアルにとらえ、その成長のための支援をしていく必要があるのです。それはまさに、自立性と協働性にかかわる自己形成の課題であり、心理的な意味と社会的な関係にかかわるアイデンティティ形成が課題となっているのです。

## 2. 大学におけるピア・サポート活動の柱と支援者の姿勢

ピア・サポート活動とは、仲間による支援活動を意味し、移民を多く受け入れてきたカナダで1970年代に、レイ・カー（Rey Carr）の指導で始まりました。その後、トレバー・コール（Trevor Cole）らによって、小学校、中学校、高校におけるトレーニング・マニュアルが具体化され、広まっていきました。こうした実践は、アメリカ、オーストラリアなどの多文化社会で広がり、ヨーロッパやアジアにおいても取組が広がっています。

対象は、小学校、中学校、高校などの子どもたちだけではなく、大学生、地域会社、高齢者、障害者など広く、さまざまな分野で活動が展開されてい

ます。学校における具体的な取組としては、ピア・サポーターの組織化、傾聴、コミュニケーション、問題解決、対立解消法などの支援スキルのトレーニング、具体的な援助計画、援助・相談活動の実施、振り返り（交流、評価）といった内容で実践が進められてきました。

イギリスのヘレン・コウイー（Helen Cowie）ら（2009）は、学校や地域における若者に対するピア・サポートモデルについて、1つには情動面でのサポート（力になること、仲介、対立の解決、カウンセリングに基づくサポートなど）、2つには教育や情報提供でのサポート（ペアの仲間による教え合い、仲間間での教育、アドバイスなど）を強調しています。そのためのピア・サポーターに求められるスキル、姿勢として、コミュニケーションスキル、積極的傾聴、問題解決の姿勢を挙げています。

この点は、日本の大学におけるピア・サポート活動を展開する際にも共通する重要な指摘ではないでしょうか。私は、多様な学生から見えてくる課題として、次の3点があると考えています。1つには学修に関する課題（初年時教育、アカデミックリテラシーなど）、2つには人間関係に関する課題（社会性、協働性）、3つには自己意識に関する課題（自己理解、自立性）です。これらは、学生の自己形成にかかわる課題であり、大学にとっては学生支援の課題であり、ピア・サポート活動の課題にもなっています。こうした点も含めて、これまでに何度か会って話をうかがってきたトレバー・コール氏やヘレン・コウイー氏のピア・サポートモデルなどに関する知見と、日本の大学においてこれまでに蓄積されてきた多様なピア・サポート活動の展開には、重なりも多く見られるととらえています。

これまで取組が行われてきた大学では、現在の学生実態を踏まえながら今までのピア・サポート活動のあり方を検証し、改めて意味づけしながら大学全体の取組として位置づけし直していくこと。取組を始めようとしている大学では、学生実態を踏まえた支援課題を明確にししながら、できるところからピア・サポート活動を工夫して行っていくことが大切です。その際に、支援課題が異なっても、ピア・サポーターとなる学生の研修、トレーニングとして、「コミュニケーションスキル、積極的傾聴、問題解決の姿勢」の3点は共通する基礎になっていきます。いずれにしても、学生同士が支え合う大学として、また、その取組を積極的に教員、職員が支援している大学として、大学の内外にアピールしていくことができるのではないのでしょうか。

### 3. 援助者に求められるコミュニケーションと傾聴のスキル、姿勢

コミュニケーションには、「情報発信」「情報取得」（一方向）と「意味の

共有」「意思疎通」(双方向)の2つの意味があります。特に、双方向のコミュニケーションが重要であり、子ども・青年のコミュニケーション力の低下を嘆く前に、学校や家庭においては、私たち大人のコミュニケーション力、かかわり方が問われているのではないのでしょうか。具体的には、「問う、聴く、語る」ことを軸にした次のかかわり方が大切です(春日井, 2014)。

第1に、「問う」というかかわり方には、3つの意味があります。1つには、問い詰めるのではなく、「どうしたんや」と気になる子ども・青年に問いかけること。この積み重ねで「あなたのことをいつも気にしているよ」というメッセージは伝わっていきます。2つには、「子ども・青年の言動の意味を自らに問う」という子ども理解の姿勢を持つこと。子ども・青年は、誰に対して、どんなSOSを発信しているのかを問うことです。3つには、一人ではわからないときには、「周辺の友人や同僚などと、子ども・青年の言動の意味を問いつつ」というネットワーク支援の姿勢を持つことです。

第2に、「聴く」というかかわり方で最も大切なのは、「負の感情を聴き取る」ことです。それが、不安やストレス、葛藤などを読み拓き、信頼関係を築いていく扉になることが多いのです。感情を聴いてくれる他者と出会うことで、子ども・青年は課題と冷静に向き合ったり、一区切りをつけたりできるのです。①感情を聴き取る、②途中で否定せずに聴く、③一緒に悩み考えながら聴く、④言語化を急がないで寄り添う、⑤限界をわきまえて聴く、⑥前提として、ねぎらい、ケアの姿勢で接することが大切です。子ども・青年の聴く力は、聴いてもらう体験の蓄積のなかで育つのではないのでしょうか。

第3に、「語る」というかかわり方で最も大切なのは、「大人が自分を語る」ことです。「先生もうれしい」「お父さんもうれしい」「お母さんもうれしい」という一言は相手を励まします。さらに、子ども・青年と同じような時期に、どんな失敗をしてきたのか、そのとき誰に助けてもらい、どうしのいで現在に至ったのかななどをリアルに語ることです。子ども・青年にとって、プロセス抜きの成功談は、大人の自慢話にしかありません。これは、生き方を考え合うキャリア教育の中軸にもなっていきます。教員や職員も一人の人間として、「アイ・メッセージ」を伝えることを大切にしていましょ。

#### 〈参考・引用文献〉

- コウイー、ヘレン／パッティ・ウォレイス(松田文子・日下部典子監訳)(2009)『ピア・サポート―傍観者から参加者へ』大学教育出版
- エリクソン、エリック・H(西平直・中島由恵訳)(2011)『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房
- 春日井敏之(2008)『思春期のゆらぎと不登校支援―子ども・親・教師のつながり方』ミネルヴァ書房
- 春日井敏之(2014)「つながって生きる―子ども・青年の自己形成と支援を考える」日本生活教育連盟編『生活教育』786号、56-63頁